

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町高等学校

耐寒ビバークと雪中歩行技術訓練 大町高校山岳部 12 月合宿

大町高校の12月の例会山行は、13（土）、14（日）の両日耐寒ビバークと冬山準備合宿を計画した。他の顧問の都合がつかないということだったので、無理もできないだろうと、松川村の馬羅尾高原キャンプ場での焚き火ビバークと雨引山での雪上歩行訓練登山というお手ごろの内容を準備したのだが、予想以上の寒気の到来。朝学校へ行ってみると、大町では20cmほどの積雪だった。これからどのくらい積もるかも分からない中、複数顧問ならともかく、一人ということもあり、馬羅尾から逃げ帰れなくなっても困るだろうと判断。耐寒ビバークならこの状況下、学校でも十分、雪上歩行も鷹狩山で問題なしと考え、内容を変えて実施することにした。幸いなこと（？）に新校設置に伴う旧校舎取り壊しにあたって、使用しなくなった古い戸棚や本棚などが粗大ゴミとしてゴミステーションにまとめてある。木製のこれらを燃やせば十分焚き火はできる。

その1、ビバーク。・・・補習授業を終えて集まってきた生徒たちに、その方針を伝え、早速焚き火用の材の準備にとりかからせる。降る雪をものともせず、解体師となった生徒たちは、嬉々として薪づくりに興じる。この「焚き火耐寒ビバーク」は松田さんの十八番。コンセプトは、「まだ身体が寒さに慣れていない12月の寒い日に、生徒に自分の火を自分で熾させ、一晩その火の番をしながら、単独ビバークの体験をさせる」というもの。野外での焚き火とビバーク、その状況を単独で対処して乗り切る状況を意識的につくすることで、精神力を鍛えたいというのがねらいだ。今回も基本的にはそれを踏襲した形での準備をして臨んだ。

ただし、河原やキャンプ場と違い、薪の量がそれほど見込めないし、さすがに校内で何箇所も同時多発焚き火と言うわけにもいくまいということで、今回は焚き火を一つとせざるを得なかったのは残念だった。焚き火そのものは、10月に県大会下見に行ったときに、上田市民の森キャンプ場でも経験済み。いったん火がつくと、まさに生徒たちの感性にも「火」がつく。火とはそういうものだ。しかし、そのときは、当然ながら生徒はなかなか火を着けることができず、松田さんと僕に散々からかわれたのだった。その時に、一生懸命火付け技術を身に付けようとしていた部長のO君が、なんと一発で着火に成功！もちろん乾いていた木ということもあるが、サバイバル技術を身につけた彼には拍手を送りたい。

13:30に薪を用意し始めて、およそ1時間半、雪はしんと降り積もる。どうせすることもないし、日暮れも早い、もういいだろうと3時過ぎに夕食準備にとりかかる。ビバークは個人の精神力を鍛えるために一人の想定だったが、火を焚くこともあるし、夕食はみんなでと、夕食のメニューは焼肉！一方で、火焚きをさせつつ、もう一方のパーティには炭熾しと夕食の準備。4時半、そろそろ夜陰が訪れるころ、戦闘開始。若者



たちは寒さも雪もなんのその、おりしも10月に入部したK君の歓迎会も兼ねて、雪中の焼肉パーティ也大盛り上がり。勢い余った生徒たちは腹ごなしに雪だるま作り。雪などなんのその……。10時ごろから、それぞれ思い思いの場所でビバーク体制にはいった。焚き火が一か所なので、生徒にはブルーシートを一枚渡し、「これを使い、軒下でもよい、シュラフも使ってよい」と言ったのだが、飽くまで「耐寒」ビバークに拘るO君は、カップを着こみ、ブルーシートのみを持って雪中の木陰で、就寝体制。かくして一人、また一人とビバーク場所を探して就寝体制にはいった。だが、ビバークの夜は長い。基本、小生は火の番をしながらそのそばでうつらうつらしていたが、それでも冷え込みは厳しい。寒さに耐えかねた生徒たちも入れ替わり立ち代わり、火のそばにやってくる。火の世話が楽しくて仕方のないY、寒くて寝るどころじゃないという新入部員のK、さすがに2時間ほどでとても耐えられないと戻って来たO、ちょっと温まってはシュラフに戻るK……。そんな中、熟睡していた一年のGは大物だ。それでも学校の前の道にも除雪車が出勤をしはじめた4時ころには、みんなさすがに疲れたのだろう。除雪の音にも動ぜず、どの生徒もシュラフの中で寝息をたてているようだった。結局、小生も2時間ほど目を閉じた。



雪中でビバークするO君

その2、鷹狩山放浪。翌日は鷹狩山に登った。小雪は舞っているものの、鷹狩頂上は学校からも見える。8時50分、学校発。山岳センターまでは除雪がされているが、気温が低いので却ってすべって歩きにくい。そこからは山道にはいったが、積雪およそ40cm。トップを変わりながらのラッセルで、10時30分山頂着。さすが、大町の子、雪などものともせずだ。正面の後立山はガスの中だが、眼下の大町市は真っ白に染まり、道路だけが茶色く筋となっている。山頂には夏まではなかった「恋人の聖地」なる妙なモニュメントが建っていたが、生徒曰く「ここは山岳部の聖地、なんとそぐわないこと」と。さもありなん。その心意気やよしだ。小生もこんなところにこんなものを造る感性を疑った。頂上で一休みしたのち、植物園の方から雪の中をダイレクトに下に見える車道に下ったところで、新入部員のK君が「雪が降るとどこでも行けるんですね」と感動。それを聞いたO君が「せっかく雪がついているので、南鷹狩山に登ろう」と提案。僕も今まで行ったことがない。面白そうだとそれに乗る。鷹狩と南鷹狩の鞍部まで車道を進み、そこから尾根をまっすぐ登りあげた。思いがけず、登り残していた山に登ることができたのは、収穫だった。



南鷹狩への尾根にとりつく

その後も、下山は正規の谷添いの山道ではなく、その南にある尾根を下ってみようと、鷹狩山放浪。僕も初めて行く場所であったが、土地勘があり、雪あればこそ、楽しい登山だった。生徒たちにも雪の降ったことを積極的に活かす登山を身をもって体験できたことだろう。思いもよらぬ形で学校の裏山ともいえるホームグラウンドの良さを再認識できた。